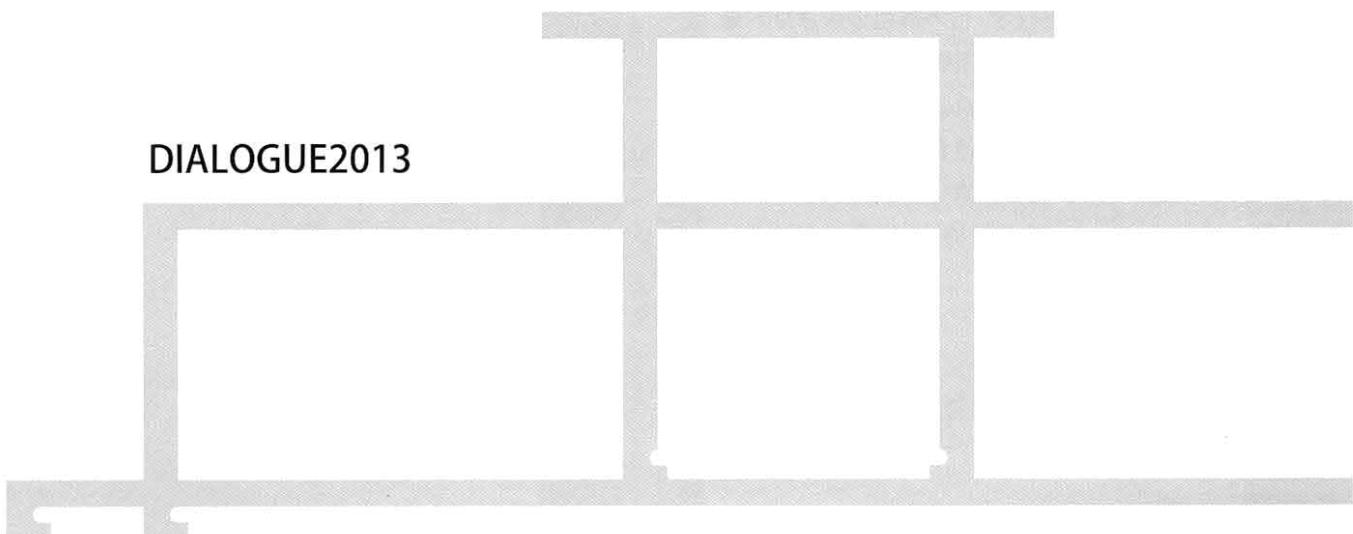


第三十三回 京都デザイン会議
京都、デザイナーの未来

京もの を世界へ

DIALOGUE2013



京都デザイン関連団体協議会

ごあいさつ

第33回 京都デザイン会議 会議録発刊にあたって

私たち「京都デザイン関連団体協議会」は、三輪泰司議長を先頭に、京都で活躍する12のデザインジャンルの団体が集まり、デザインをテーマに話し合う場を設けるため結成されました。そして年に一度、デザインを切り口としたテーマを挙げ、その先端を担う内外の専門家をはじめ一般市民が気軽に参加出来、意見交換できる会議を企画し開催してまいりました。

33回目になる今年の会議は「京都デザイナーの未来『京ものを世界へ』」をテーマに、世界的に活躍されているパネラーをお招きし、その実情をありのままに語っていただきました。会議に参加いただいた方々はもとより、関心を持ちながらご出席いただけなかった方々にもお目通しいただき、今後の活動の参考にしていただければ幸いと存じます。

社団法人京都デザイン協会

理事長 奈良 磐雄



京もの を世界へ

京都デザイナーの未来

第三十三回 京都デザイン会議

日本を代表する映像ディレクターの(株)東北新社 専務取締役 中島信也氏を東京から迎え、
アニメ・キャラクターグッズや絵本の企画・制作・販売から
各種イベントの企画・提案まで幅広く手がけられている(有)エム・イー・エフの代表取締役 森村義幸氏と
京都デザイン賞 2012 の京都府知事賞を受賞し、着物の進化した形を追い求める野崎文子氏
及び 2011 年国際的なデザインの祭典「ミラノサローネ」に出演されたり、
京都デザイン賞 2012 の京都市長賞を受賞された岩城製作所 奥山幸一氏に集まっていただき、
日本国内はもちろんのこと、京都から世界にどのように
「京もの」を発信していけば良いかということに焦点をあてて、討論をしていただきます。

2013年3月10日(日) 午後2時30分～午後4時30分

会 場／メルパルク京都 4 階研修室 3「藤」

京都市下京区東洞院通七条下ル東塙小路町 676 番13

特別ゲスト 中島信也 (株)東北新社 代表取締役専務／CM ディレクター

パネラー 森村義幸 (有)エム・イー・エフ代表取締役

野崎文子 ファッションデザイナー 京都デザイン賞 2012 京都府知事賞受賞

奥山幸一 (株)岩城製作所 営業・制作部長／京都デザイン賞 2012 京都市長賞受賞

総合司会 才門俊文 才門俊文建築設計事務所 代表 社団法人 京都デザイン協会 常務理事

主催 / 京都デザイン関連団体協議会・社団法人京都デザイン協会 後援 / 京都府



司会 小山比奈子 / 京都デザイン協会理事

小山 お待たせいたしました。時刻となりましたので、ただいまより第33回京都デザイン会議を開催いたします。私、本日の司会を務めさせていただきます、京都デザイン協会の小山比奈子と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。
では、まずははじめに社団法人京都デザイン協会、奈良磐雄理事長よりご挨拶を申し上げます。奈良理事長よろしくお願ひいたします。

奈良 改めまして、こんにちは。京都デザイン協会の理事長、奈良と申します。昨日まではすごく暖かくて、春の兆しがそこまで来ていましたが、今日はまた雨というあいにくの天気の中ご参加いただきまして、本当にありがとうございます。

この京都デザイン会議は、京都デザイン関連団体協議会といいまして、12のデザイン関連団体が集まり、三輪議長を先頭に32年ほど前から毎年会議を開催し、デザインで京都を元気にしようと画策しているものです。32年前の設立時には、私はまだ参加させていただけなかったので詳しい状況はわからないのですが、皆さんのお手元にお配りしています、昨年の会議録の冒頭に、三輪議長が京都デザイン関連団体協議会の生い立ちをお話しいただいた詳しい内容を掲載していますので、参考にしていただければ幸いです。

今日は2時間ほどの限られた時間ですが、世界的に活躍されているものづくり、また情報

発信をされているパネラーの方々にお越しいただきまして、その実情をお聞かせいただき、ざっくばらんに、また質疑応答の時間もとらせていただけたらと思っています。この33回目の京都デザイン会議を有意義に、また成功に終わらせることができますよう、ご協力をお願いいたします。また例年通り、33回京都デザイン会議の会議録もつくらせていただきますので、よろしくお願ひいたします。なお、本日の会議の主催は京都デザイン関連団体協議会で、京都デザイン協会は当協議会の事務局を担当させていただいている事を申し添えておきます。

パネラー自己紹介 中島信也氏

小山 では、パネラーの皆さまをご紹介させていただきます。パネラーの皆さまには自己紹介をどうぞよろしくお願ひいたします。本日の特別ゲストとしてお越しいただきました株式会社東北新社代表取締役専務、CMディレクター中島信也様、よろしくお願ひいたします。

中島 自己紹介させていただく感じで映像を見ていただくのが一番ええですかね。僕はCMのディレクターをやっておりまして、まあウォーミングアップのつもりで、ちょっと見ていただきことにいたしましょうか。自己紹介がてらになりますけど、しょうもないものをちょっといきたいと思います。これは井上雄彦さんという僕の友人の漫画家の先生が描いてくれた自画像というか、絵ですね。スラムダンクとか作ってはる人ですけどね。すごく似てる。トークをやったときにホワイトボードにペペッと描いてもらったんですよね。それを写メしたものがここの表紙になってるわけです。

ちょっとだけお時間いただきますけども、僕は1959年、福岡県の八女郡というところで生まれました。黒木町という、あの黒木瞳さんが出生したところです。で、黒木瞳さんと僕は同級生。でも僕は1歳で大阪へ行ってしまう



パネラー 中島信也 /CMディレクター／東北新社

んですね。大阪では僕は神童と呼ばれてた、例によってね。いま隣にいはる森村さんも神童と呼ばれてはったんですけどね。でも神童と呼ばれてもだめなんです。どうだめかというと、皆さんと違って僕、足が遅かったんですね。もう男の子で足が遅いっていいたらこれは終わりです、ほとんど。ここで人生二つに分かれます。小学校のときに足速い子は足速い人生まっしぐら。で、遅い子はどうしようもないんです。別にモテたくなかつたらいいんですけど、モテたいのに足遅い。これモテないんですね。で、モテるためにどうするか。これはもう、ブルコメかピンキラですね。ブルコメかピンキラといって、わからない人も多いと思う。もうヤングの皆さん知らんよね。森村さん、わかる？

森村 わかりたくない（笑）。

中島 はい（笑）。で、13歳にして中学入学を果たす、これは普通です。足が遅いんでモテないんですけど、モてるためにここでですね、これ、ビートルズになればえんやってことになるわけです。ビートルズは当時、世界で一番モテとるヤングやった。で、僕はちょっとした進学校に行くんですけど、モテたい、今度は足遅くてもいいんですけど、勉強できへん。で、勉強できへんということはですね、残された道はビートルズしかない、ということになるわけです。で、親にいってビートル

ズになる宣言というのを果たすんですね。写真の左にいるのが僕で、右側がカワムラ君。この前、京都の桂でこの二人組復活、35年ぶりに昔の曲をやらせていただきましたけど、ビートルズになるいうたら父に反対されたんです。「ビートルズ食えへんぞ」と。で「勉強できへんのやったら美大でも行け」いうて無茶苦茶なこというんですね。僕は音楽やりたいのに、美術大学なんかとんでもないと思ってたんですけどね。でもよく考えてみると、美大というのはアーツスクールのことです。この人ジョン・レノンがじつはリバプールのアーツスクールで、隣の学校のポール・マッカートニーと出会ったんですね。で、僕は隣の学校どころか、才門さんと同じ学校に行つてたんやけどね。

才門 はい。

中島 ポール・マッカートニー、いそうもない学校やった。

才門 まあそうやね、見かけもしません（笑）。

中島 見かけもしましたけども、これはもうアーツスクール経由ビートルズ行きチケットというつもりで武蔵野美術大学に入った。で、ビートルズになれないで、ケチャップを結成します。写真まん中が僕で、右が大西君、左、栗原君。栗原君は音楽の道に進みまして、栗コーダーカルテットという笛のバンド作っています。

いよいよ自己紹介に入るんですけども、まず私の曲を聞いていただくと。のちほど私が曲を作ったコマーシャルも見ていただきますけど、私が作った「餃子の歌」を聞いていただこうかと思います。この歌を聞いていただくために、今日はたいそうなアンプを用意していただいて、先ほどからいろいろと苦労しているわけなんですね。人の歌を聞くというのは非常に苦痛だし、しかも素人の歌なんて迷惑だと思うんですね。その迷惑を、ちょっ

と申し訳ないという気持ちで、私はCMの監督なんですけど、私が演出しましたCM映像を各所に散りばめてございますので、これを見ていただくと、あっという間に私が何者かがわかるという便利なシステムで、迷惑を顧みず聴いていただきたいと思います。今日の一曲目「餃子の歌」でございます。

(中島信也作詞・作曲「餃子の歌」)

はい、すいませんでした。どうもありがとうございました。これはまあ、ちょっとだけ古いファイルになるんですけども、このようなものにも映画監督と同様に監督が存在しています、僕はその仕事をしてると。で現在、僕は武藏美の校友会（卒業生の団体）会長をやってまして、その京都支部長が才門さんだった、というところから京都とのつながりができました。

大阪を出たのは18歳の時ですから、ここへきてまた関西に、このようなかたちで戻させていただくことには不思議なご縁を感じます。昨年初めて京都デザイン賞の審査に参加させていただいて、今日また何かしゃべれということで呼ばれてるんですけど、「京ものを世界へ」という今日のテーマは大変おもしろいなと思っています。実際、僕は京ものをつくってるわけではないんですけど、皆さんの話に入って愉快な時間になればいいかなと思います。長くなりましたが自己紹介を終わります。

小山 中島信也様ありがとうございました。

パネラー自己紹介 森村義幸氏

小山 では次に、有限会社エム・イー・エフ代表取締役、森村義幸様よろしくお願ひいたします。

森村 森村と申します。今日は若干つくったものというか、会社でプロデュースしたものを持っておりました。会社自体は2001年に設立しました。本職は肉屋なもんで、肉屋の販促



中島信也作品 / 日清食品「カップヌードル hungry ? 恐竜編」

をしたいと思って販促会社を立ち上げたら、する必要ないと怒られたので、キャラクターグッズのほうに行ったんですけども。まあ初期の頃は、どこへ行っても追い返されるっていうか、そういうところから始めて、何とか今日までこられたんですけども。いまではみんなお友達になって、幸せに暮らしています(笑) ということです。

もともと食品玩具ってジャンルがあったんですけど、そのプロデュースが最初です。で、かれこれ7、8年くらい前からですかね、原型を企画するようになりましたので、原型とプロデュースと、あとはパッケージや周辺のデザインも全部一貫して受けるようにして始めたものがいくつか。その後、一部ホビー関係の玩具の試作原型とパッケージ、という流れを踏みました。これは自社製品の宇宙戦艦ヤマトです。2万円くらいする模型なんですが、現在ネットで販売しています。その版権を中島先生ところの東北新社さんがお持ちで、これはまったくの偶然ですけども。まあそんな感じで、あとは出版関係もやってますし、八重洲の地下にラスカルショップっていうのがあるんですけど、そこのOEMの供給ですね。ヤマトの関連でいえば、これは松竹系の映画館での限定品と、一部ファンクラブ経由で売っていただいているもののOEMです。

京都だけでいいと、一条通の妖怪ストリートでこういう千社札を売らせていただいた



パネラー 森村義幸 / 有限会社エム・イー・エフ代表取締役

り、亀岡市のほうでアユモドキ、これはお子さんが家で夏休みの課題としてつくっていただけるようなコンセプトでやっております。アユモドキのほかにトンボとかもあるんですけど、まあ徐々にということで。その延長が、この祇園祭の綾傘鉾。綾傘鉾さんの専用アイテムみたいな感じで、2年ほど前からペーパークラフトで、また去年は木札で、はい、今年はいま考え中です。あと、こういうブライダルの記念品をつくったりとか、これはお茶屋さんとか飲み屋さんのコースター。こういうものは飲みながら営業とってきて、趣味と実益を兼ねて仕事に結びつけるという感じです。

今日は最近の作品しか持ってきてませんが、最近はキャラクター、販促、OEMが多くなりました。それまでにはイベント的なものとかライブの演出、CDのプロモーションと選曲、パッケージ協力とか、そういうことをして今日までしております。僕らはクリエイターというよりもプロデュースが仕事なもので、このたび京都デザイン協会の賛助会員にさせていただいたことで呼んでいただいております。今日は楽しく過ごせればと思いますんで、よろしくお願ひします。

小山 森村義幸様ありがとうございました。

パネラー自己紹介 野崎文子氏
(京都デザイン賞 2012 京都府知事賞受賞)

小山

次に、ファッションデザイナーで京都デザイン賞 2012 京都府知事賞受賞の野崎文子様、よろしくお願ひいたします。

野崎

野崎でございます。ものづくり屋が何をしゃべっていいのかわかりませんけど、私の思いを映像にしていただきましたので、映像での作品を見ていただきながら語らせていただきます。「絹衣（きぬごろも）」という名を付けておりますのは、すべて日本のきもの地、新しいきもの地を織っていただいたり、染めていただいたりしながら制作してることで、これを登録商標にしまして「絹衣」の世界と思って見ていただければと思います。

私は東京で仕事をしてたんですが、縁あって現在は滋賀県の長浜にあります。きものの業界が非常に低迷してるなか、ちりめんで有名な長浜の白生地もしかり。そこで、白生地を何か他のかたちに生かしてもらえないかという出会いが20年前にあって、何も知らない私が東京からまいったことから始まります。この映像はアメリカのイベントですが、日本のきもの地が素材であるということをお見せするために、羽織ってるのはちりめんで、ちりめんを見せてています。こちらは美術館でのショーです。階段を降りてくるなり長浜のちりめん、反物の白生地を表現したものです。洋服地とは違うよ、日本のすばらしいきもの地だよ、ということを見ていただくためです。昨年、京都デザイン賞の京都府知事賞をいただいたのがこのかたちです。色は違ったんですが「羽織る、まとう」がテーマです。日本の反物の生地は広くないんですね。幅36cmとか、いまはちょっと広めで40cmくらいになりましたけど、いかにハサミを入れないで「まとう」かたちにできないか。それはどういうことかというと、人間には体型があるわけですけれども、体型に関係なくまとう、ジーパンの上にもまとう、もちろんきものの上にもまとまるかたち。これが可能になれば、きもの地の用途がもっと広がるんではないか。そういう単純な私の発想から、この思



パネラー 野崎文子／ファッションデザイナー
いを基本にして、いかにハサミを入れないか。
これはきものの世界と一緒に。直線縫
いでハサミを入れないという作業から生まれ
たかたちと、こちらは陣羽織と思ってつくっ
ております。

次は、これは夏に着る紗という生地ですが、
もう日本ではほとんど織られなくなりました。
紗といえば夏のきもの地の代表だったら
しいですけれどもね。いかにきものが低迷し
てるか。しかし、出会うと紗はすばらしい素
材なんです。織り方もしかり。そこで、この
透けた感覚の布幅いっぱい、襟元には染物を
使って、うしろにものすごい日本の文化の流
れをつくってるんですが、日本の文化を見せ
るために、よく海外のショーでは、風をはら
ませながらぐるぐる回っていただいておりま
す。これは素材のすばらしさを見せるためと、
この染めの美しさは日本にしかないのではな
かろうかと思って、提案するためにやってお
ります。この色合わせは、私も絵を描いてお
りましたので、わがままな色合わせになって
おります。

これはドレスの上に帯が締められています。
きものが売れないとき帯も売れない、それを何
とかしたいってことで、帯ベルトというものを
開発しました。ジーパンの上にもいいし、
こういうドレスの上にも素敵ですよ、という
提案を行っております。これが2012年受賞
のモデルになったちりめんのロングベストで
す。実物を着てみていただかないと雰囲気が

わかっていていただけないので残念ですが、布幅
いっぱいに動かし、中のブラウスも幅だけです。
襟元は日本のゆったりとした襟元で、基本はあくまでもきものに近づけるかたち。それ
で美しい姿はないかなという提案です。これも、きもの上にも羽織れます。

ここからは羽織るものとして見ていただけれ
ばいいんですが、これもリバーシブルでコー
ト仕立て。この上にちょっと光ったところが
見えます。ある業界のものですけれど、この
業界も潰れてしまったみたいで、もうありま
せん。非常にすばらしいものが、こうしてな
くなっています。で、私はきもので着られる
ならば、こうやってコートにして、男性だ
って女性だって、ジーパンやきもの上に羽
織りましょう、と提案しております。これも
すべて、そのまま羽織るかたち、まとうかた
ちです。男女、関係ないんだよ、といつも展
示会ではお見せします。

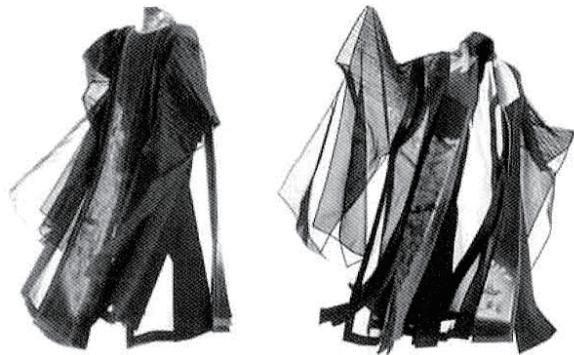
次に子どもが出てまいりましたけど、ゆりか
ごから墓場までという言葉がありますが、日
本のきもの地がそんなにすばらしいんだったら、
小さいときからきもの地に親しませて、
七五三だったり成人式だったり、ことあるご
とに馴染ませないと、なかなか一気にはきもの
地に親しめないんじゃないかなと思っていま
す。これは私の孫ですが、ピアノの発表会の
ときにつくったきもの地ワンピースです。発
表会を見に行きましたけど、なんて日本の生
地はすばらしいんだろう。私のデザインをい
ってるんじゃなくて、素材のすばらしさです。
記念写真で並んでも、きもの地は一番光ります。
これは日本人が感じなきゃいけないこと。
これは男の子と一緒に撮ってますが、男の子
の洋服地と比べて、素材感が全然違います
しょ。

海外に向けて仕事をしていますが、私は日本
中、ギャラリーやデパートにお呼びいただき
て、洋服とはちょっと違う、こういうまとう
かたちを提案しております。これは紳類です
ね。こちら辺のものは男性も結構羽織ってい
ただいてます。ちりめん地は少しおしゃれつ

ぼくなりますが、紬風のもので仕立てますといろんな形に、ジーパンからきものまでお召しいただけるような気がします。

では、どういう方が「絹衣」を羽織っておられるのかですが、彼はギタリストで絹衣の愛好者で、舞台に使うと非常に男性に似合います。これは滋賀県の嘉田知事です。嘉田知事もうちに見えられて「きものを着て海外で講演をやったけど、野崎さん、これのほうが便利だし、ぜひ作って」とおっしゃって、中はワンピース仕立てにしております。「講演なさるときは中のワンピースを着てください、それにブレザーを羽織ったらスーツになりますよ」と。で、レセプションになったら上を省いて、これも本当にきものに近い線で、海外では大変な拍手をいただくそうです。私も長浜の宣伝をするわけではないんですが、次も長浜の市長、市会議員、経済部長という方々です。うちにこられて、とにかく長浜はもう一度きもので発展していかなきゃいけないっていう話し合いがありまして、いま長浜市長にも羽織っていただいております。これは皆さん、おわかりですよね。「絹衣」を着て京都を歩こうと。どういう表現で、どう見られて、どう映るかっていうのもやってみないといけないよね、と京都でお花見をしたときの風景です。異様といいますか、存在感がすばらしいと私は思うんですが、いかがでしょうか。

ここからは海外ですが、右はモナコの国王です。モナコでファッションショーをということで企画されたときに、国王が参列してくださいまして、私の作品を羽織って歩いてくださってます。で、ぜひ欲しいとのことでそのまま持っていたいです。次は化粧品会社の社長ですが、彼女の企画で日本のものを海外のファッションショーでやってみよう。モナコにはとくに、日本の文化が愛されている空間が多くあります。そういうことでやらせていただきました。ちりめんのドレスは、このとき初めてウエディングドレスにもなるんじゃないかと思って7、8着持参し、モナ



野崎文子作品／「絹衣」京都デザイン賞 2012 京都府知事賞受賞

コの各地で撮影して帰ってきました。ちりめんのドレスはすばらしいです。これは長浜の仲間たちにプレゼントしまして、滋賀県の指定になって、これからはドレスも広げていこうという活動をしています。素材です、あくまでもね。

これはモナコの国王主催の大パーティ。世界のお金持ちが集まる場所に招待いただいたものですから、私はちゃんと普通の、本当にシンプルなものを羽織ってるんですが、男性たちが見慣れない服だと思うんでしょうね。インタビューが多かったです。これが洋のドレスですね。男性たちが着てるのも普通のもの。そのなかで私と左は娘ですが、二人の着ているものだけ、なんだかちょっと違う雰囲気つていうことで、皆さんから注目していただき、新聞記事になりました。これは、パーティに入る前のお庭での撮影です。これはスイスですが、場所的にもどんな方がモデルになるかは大変なんです。で、こう着てこうやって手を挙げください、中を見せてくださいと一生懸命、裏方でこうやって指導します。お洋服だったら自然に表現されるでしょうけど、絹の衣を最大限すばらしいところを見せていただくために、だいぶん裏で指導します。これは歩いてもらっています。場所は教会の中でした。とっても素敵な方たちだから、これ普通に着れるのよってシンプルに提案しています。はい、これは振袖地を使ったドレス。大きく風をはらませながら歩いていただいてお

ります。私は「風はらむ」というタイトルが一番好きで、動いて動いて動き回ってもらいます。だから、きものの動き方とはちょっと違います。これはアメリカです。これも振袖からかたちをとったのですが、本当にハサミが入ってませんでしょ。形いっぱいをすべて使ってます。これが動くと風をはらんで、すばらしいんですね。次も男性ですが、大きなお髭を生やしてらして、襟に帶地を使ってるんですが、なんかおもしろかったので、これを使ってみました。これもすばらしいですね。女の子たちがこのようなドレスも作りますが、ウエストラインは洋服に似せてしまつてますので、よく見るかたちかもしれませんが、素材の美しさはほめていただいてます。

これは中国の南寧市で、大規模な万博をやられたときのショー。まあ暑いところ、これフィナーレですね。もう大変な騒ぎで、オープニングセレモニーに使ってくださいました。きものの美しさを見てくださいます？ 改めて洋服とは違う美しさがあります。これをきもので羽織らないのなら、日本はなんとかしなきゃいけないと思って、やってみたんです。で、最後に人。これは人っていう字です。陣羽織ってありますね。武将たちの「陣」じゃなくて、私のは「人羽織」。登録商標にしたんですが、羽織るかたちを世界の人たちに広めたらどうだろうということで、羽織るかたちにはすべてこれを裏に入れております。私はあくまでも作り屋ですから、これをどうプロデュースして、どう広げるかっていうのは、また違う人たちにやっていただきたい。今日はそういう提案をさせていただきました。ありがとうございました。

小山 野崎文子様ありがとうございました。

パネラー自己紹介 奥山幸一氏
(京都デザイン賞 2012 京都市長賞受賞)

小山 では次に、株式会社岩城製作所営業・制作部長、京都デザイン賞 2012 京都市長賞を受賞されました奥山幸一様、よろしくお願ひいた



パネラー 奥山幸一 / 株式会社岩城製作所 営業・制作部長
します。

奥山 こんにちは、ただ今ご紹介いただきました岩城製作所の奥山と申します。今日ここにきてお話をすることなんんですけど、まだまだ本格的にものづくりにかかりまして2年足らずなんですね。で、大きな結果が出てるわけでもないですし、とりあえず素材をつくることから6、7年かかるけど、ふだん仕事をしながらですね。それでもがんばりれば、海外に持っていくというが大きな目標でしたので、それに向かって動き出して、日本に出す前にイタリアのミラノとパドヴァの二つの展示会に出演させていただきました。結果は、そこそこのお話もあったんですけど、とりあえずインダストリアル的なお話が多かったです。どうしても手編みでやっておりますので、ものができない数ができない、値段的にもちょっと合わなかったです。この辺がネックかなという、いろんな勉強の過程でここまで来ています。

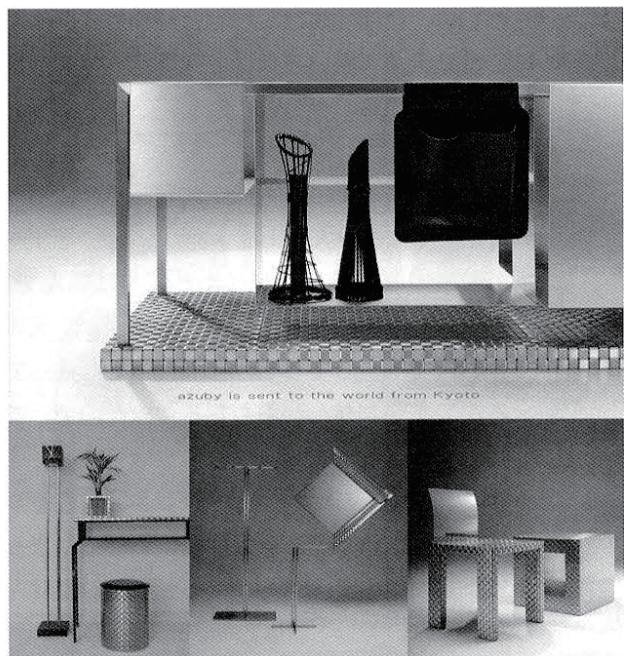
この写真は、京都高島屋2階の高級ブティックのあるフロアですが、そちらのメインで展示会をさせていただいたり、あとイタリアから帰ってすぐに東京ビッグサイトに出演していただいたりとか、そういうことはあったんですけども、バイヤーさんとは値段的、数的なところで、そこが一番大きなネックになつたということが勉強でした。パラパラとお話はいただいてますけど、まだまだ本当の商売

としてはこれからかなということで動いております。だから、先ほどの野崎さんの完成形と違って、私はこれからという段階なんんですけど、どうしたらいい展開でこの商品を受け入れてもらえるか、販売できるか、ということを模索中でございます。

こちらは京都デザイン賞の作品としてつくったものです。私は自分で全部つくっておりまして、それもすべて手編みでやっておりましたため時間もかかりますので、安くは売れないと数をつくって安く売ってほしいというお話をいただくのが現状なんですね。だからこちらとしては、これをどの市場で売っていけばいいのかを模索している段階です。応援ファンドとかの支援をいただいたりしており、こういったプロトタイプのものを作製してきました。実際のところ、販売に繋がる所までには至らなかったです。今回、雑貨関係に挑戦してみようと、現在あるメーカーさんとデザイナーさんとの3人で動き始めました。まもなく京都のギャラリーで展示会をやるんですけども、同時に新宿の会場でも展示します。

これからの展開としては、中小機構のファンデ事業とか、いろいろご支援のお話も頂いており検討中です。本当のところ、最終的にお会いできるデザイナーさんとのマッチングがなかなかうまくいかないのが現状で、デザイナーさんと、私たち注文する側との方向性が合わないという問題がありまして、その辺がネックかなと思います。実際いろいろ話をしてみて、試作をしてみて、という段階を踏んでいかないとあかんのはようわかってるんですけども、とりあえずデザイナーさんに関しては時間がとれない。私はステンレスの板金の仕事もやっておりますんでね。こちらも仕事が入りますと、なかなか時間が取れないのです。お互い金銭面も含めていろいろと問題がありますが、でも、もっと前向きなところでポイントが合えば、何か新しいものができるんじゃないかなと。期待しております。

今日はそういうことを、もしよければアドバ



奥山幸一作品 / 「azuby シリーズ」

京都デザイン賞 2012 京都市長賞受賞

イスいただけないかなと思ってまいりました。京都からものづくりで発信するというのは頭から思ってることでして、海外に発信したいというのが目標です。今度の雑貨に関しましても、来年かな、ちょっとわかりませんけど、メゾン・ド・オブジェに出展したいという目標で動いているところです。これからどういうふうにものづくりが変わっていくかはわかりませんけども、何かいいアイデアがございましたら、あとでも結構でございます。お話をいただければ幸いです。よろしくお願ひ申し上げます。どうもありがとうございました。

才門

「まだ写真が何枚かありますので、ご説明いただけますでしょうか？」

奥山

はい。これはステンレスで編んでます。ステンレスメッシュという名前で私は呼んでおりますけども、これを作るのに、先ほど申しました通り6、7年かかっておりまして、やつとかたちになりました。これは、どっちかというと雑貨に近いんですけども、手づくりです。これはパラパラとご注文をいただいておりまして、高島屋で展示しておりました。い



総合司会 才門俊文 / 京都デザイン協会常務理事

ろんなことをやりすぎて、あまりアイテムが多すぎるのもいけないかなという反省点もあります。

こちらはミラノとパドヴァに出展しました。イタリア人デザイナーとコラボした作品です。これもイタリアのデザイナーさんと私のコラボ作品、こちらもそうです。これはイタリアの水回りのメーカーですけど、日本とイタリアでこういう展示会をさせていただきまして、そこに出品した作品です。これもそうですね。ストゥールやチェアをつくっております。

これは水回りの、洗面台の下に置くものです。今回新しいブランドをつくりまして、小物関係で動物をメインにしまして「dento kogei(伝統工芸)がzoo」というタイトルで売り込みに回っております。これはひとつの作品、ストゥールなんですけどキャスターが付いてまして、こういうアニマル柄を使った置物でもあります。椅子もあります。こういうのを展示会に出しております。こちらもワインボトルとか、そういうもんですね。

才門 「写真はそれぐらいでしょうか？」

奥山 はい、これが最後です。これは作品がちょっと大きすぎるんですけども、このようなものまでつくっております。これは自分のところのショールームにも置いています。

小山 奥山幸一様ありがとうございました。

小山

では最後になりましたが、京都デザイン会議実行委員長および進行役を務めさせていただきます才門俊文よりご挨拶をさせていただきます。

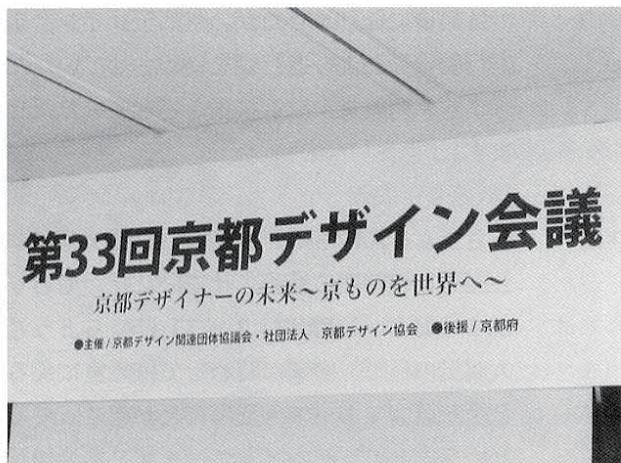
才門

皆さま、こんにちは。毎年この京都デザイン会議をこの時期に進めさせていただいておりますけども、一昨年は3月11日のちょうど大震災の日で、会議が終わって控え室に戻ると紙が置いてあって大変なことが起こっているということで、テレビをつけますとあの惨状ということがございました。昨年はまた同じ時期でしたが、企業とデザイナーとを結ぶということで、それぞれ企業の方々とデザイナーの方々とに集まっていました。そして今年は「京都デザイナーの未来、京ものを世界へ」というテーマで、いまご紹介させていただいた4名の方をお招きして、これから時間の許す限り話し合っていきたいと思います。時間がございましたら、最後に皆さんから質疑応答というかたちでご意見を聞けたらなと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。短い時間ですけども、ではこれから始めさせていただきます。

テーマ「京ものを世界へ」に繋がるヒントは…

それでは「京ものを世界へ」と銘打って、今日は会議を進めさせていただきます。

昨年はどんなことがあったかというとですね。問屋がしっかりしていて、京都というか関西の場合、一応昔は図案家から各職に渡るというひとつの流れがずっとあったんですね。図案家は今までいうデザイナーですが、そういう時代が変わってしまって、いまはその流れが壊れてしまってるわけです。それで、図案家と各職をつなぐものは何であるかと。図案家は図案家、デザイナーはデザイナー、中小企業の方は中小企業の方と、それぞれがバラバラに進めているという状況です。そんな状況だからこそ、デザイナーも企業も向き合って、新しいものを生み出していければと



ということで、昨年はいろいろ貴重な意見を交換しました。

今回は先ず、どういう方をお呼びしてるのであることを皆さんにわかつていただかないと、4名のパネラーがなんかいろいろ話してたなっていうだけではだめですね。こういう方がこういうことをやって、そういう意見をいってるんだということを捉えてですね。それでは俺だったらこうやるなどとか、そやそや今日はええヒント得られた、俺こうやっていこうとかですね。そういうふうに皆さんに捉えてもらえばありがたいかなと思っております。それと、パネラーのお二方は先ほどご紹介がありましたように、昨年度の京都デザイン賞にて、知事賞と市長賞を受賞された方でございます。お二人ともエネルギー・シユにいろいろ活動されている。賞を取られる方は、やはり何かを持ってるわけですね。その他大勢の方々とちょっと違うものを持っておられて、それが審査員の目にとまり、結果、賞をとられる。そしてそこからいろんなものを発信していくけるような方々になっていくんじゃないかなと思っております。

中島信也的京都は大きな誤解？それとも実態？

才門 まず最初に中島信也さんにお聞きしたいんですけれども。中島信也さんというのはおもしろい立ち位置におられるなあと私は思っておりまして。ご紹介にあったように生まれこそ

九州ですが、青年になるまで大阪におられて、それから東京に行かれた。東京で成功されて、世界的にも評価を受けてということになって、また日本でも評価を受けて、どんどん忙しく活躍されておられます。それが最近、縁あって関西にまた立ち寄っていただけたり。で、私が知る限りでは、現在進行中のCMでも関西とくに京都を捉えておられますね。なんかこう、僕らわかってたつもりやつたけど、中島さんにパッと映像見せられると、ああ、そうだったなあって気付かせていただくことが多いんです。それは京都の外から見てこそ気付くことが多いと思うんですね。でも東北とか北海道の方が京都に親しんで意見をいっていただくというのではなくて、中島さんの生きざまというか、生きてきたプロセスというか、そこから何か意見をいただけるんじゃないかなと思ったわけです。

中島

はい、そうですね。特殊な、やっぱり日本で一番変わったところやなっていう印象が僕はあるんですね、京都っていうところは。大阪にいたときから思ってましたけど、だいたい受験の前とかに京都にきて、お参りをして、だから神様仏様に会うには京都にくるんですね。大阪にあるにはあるんですけども、商売の神様が多かったりするんで、やっぱり勉強で受かるためには京都にくるというのが最初やったんですけど。

大人になってから見てみるとですね。さっきちょっと変わってるなと思ったんですけど、やっぱり他のどこの都市とも違う気配が漂ってるというのがものすごくある。それについて、さっき森村さんと話してたんですけど、もしかしたらそれは気配でしかないのかもしれない。実態はよくわからないけども、確実にここで暮らしておられる方のなかにあります。で、ここでデザインとかクリエイティブ、建築とかをやっておられる方の中には、何か京都というちょっと不思議なものが宿ってるんじゃないかなと。それは物質的、物理的なもんじゃなくて、何かが宿ってるんちゃ

うかなど、そういうふうに感じたんですね。ただ、先ほど野崎さんと奥山さんにお話ししていただいたところは、それはもうすでに京都を飛び越えてて、いわゆる個々のクリエイターと世界の関係になってるな、というふうに僕は感じました。だからお二人にお会いしてみると普通っていうか、別に京都京都してるわけじゃなくて、才門さんにも出身は全然京都とちゃうのに京都京都してんねんけども、話したり仕事してると、じつはそんなに京都京都してるものがあるわけじゃない(笑)。こちらにおられる森村さん見てみても、じつは僕が不思議や不思議やと思ってた京都というもの何か目に見えない、まあいろんな言い方ができると思いますけども、イメージみたいなものがね、こう、こちらに来てお会いすればするほど、じつは実態っていうのは何なんだろうなと、不思議な気持ちになつてんのが正直なとこです。外から見ると京都風とかいう、今朝も七条の市場の先のラーメン屋に、これは森村さんおすすめのラーメン屋なんですけど、ものすごくパンチが効いてるわけですよラーメンが。醤油ラーメンかなあ、何やったっけ？

森村 「とんこく」です。

中島 とんこくラーメン。東京で京風ラーメンっていうとあっさりした、鞠麿が入ったフニャフニヤな細い麺のやつで、勝手に京都っていつてるんですけども、じつはこんなおっさんがガツのあるラーメン食ってるってところからしても、じつは知らず知らずのうちに僕らが外から勝手に京都を規定してるのかなと。ちょっとそういう気が、京都にくればくるほどしてきますね。僕たちが規定してる京都というイメージの上に、僕がつくっております伊右衛門のCMなんかもあるんですけども、勝手に規定してるっていうのはすごくあるなど。そこはいい部分もあるかもしれないけれども、じつは大事な間違いかなというふうに思ってます。この京都から「京都デザイ



ナーの未来、京ものを世界へ」と発想するときに、その部分は意外と大事な、大きな誤解なのかなというふうに自分では感じたりしますね。

才門 大きな誤解っていうのは、往々にして、例えば人と人が会って恋が芽生えて、結婚してそれが後から大きな勘違いっていうのもよくあることですね。その勘違いが別に悪くはない、僕は悪くないと思うんですね。その勘違いがあって、人間の世の中ができるんだと勝手な思い込み、男性は男性の女性に対する思いがある。女性は女性で男性に対する思い込み、こんなんであってて欲しいって、それが違ったときにガーンとこう、崩れ落ちるわけなんですけれども。で、それから惰性の人生が始まると。

中島 惰性が始まると(笑)。

才門 でも野崎さんにお聞きしたいんですけども、きものっていうのは、すごい歴史があって、そのなかで仕事をしておられて、例えば京都でいうと、きものっていうのは呉服問屋からこうずっとヒエラルキーがあって、その業界がビシッとできあがって、それで何百年ときた。それがですね、あぐらをかいてたわけじゃないんでしょうけど、世の中と合わなくなつて、流通経路が壊れてきてるわけですよね。いったん壊れてしまって、壊れたからこそ芽生えてくるっていうのがあると思うんですけど



ども、当初はすごいやっぱり、京都を含めて関西は保守的ですし、それにすがって生きてきた人たちも多かったです。でもそれは大事なことであると思うんですね。また中島さんがおっしゃったように、誤解、それに実態がないんじゃなかろうかっていうことなんですが、ただ建築の場合、私は伝統建築やってるんですけども、やっぱりお茶の世界とかいろいろ、本物はちゃんとあるんですね。必ず本物はあるんです。ただ、皆さんを見れないだけで、扉を開けて、扉を開けて、扉を開けて、で、その奥にやっと存在する。普通はそこまで行き着けないので、普通の人はそんなんほんまにあるんかいなと。それまた、その雰囲気だけを利用して仕事としてやっていく方もおられると思うんですけど、そういうような、まあ僕も京都にきて25年目になるんですけども、そういうむずかしさと、それをまたうまく利用して、理解していくかなくてはならないということで、京都でがんばっても時間がかかる、海外に出ていきたいという発想で、奥山さんなんかもそうかもしれません。そこで話は戻りますけど、野崎さんもきもののことというと、そういういろいろなギャップ（伝統と現代の好み）とか、いろいろなご苦労があったんじゃないかなと思うんですけど、いかがですか。

野崎

きものといったら、私のなかでは京都って思ってたんですね。その京都がどうなったかと

室町とかを見ますと、非常に風化してしまってる。でも長浜は京都に白生地を産出してるんです。京都が泣くと長浜も泣いちゃう。ですから私が長浜から呼ばれたのも「きものがだめだから何とかしてもらえんだろうか」と。私、絵描きなんですよ。デザインはしたことなかったし、ちょっとしたご縁だけで長浜にきたわけですが、私の考え方のひとつでは、私たち日本人の体型はきものが一番似合うと思っています。だから、できればきものを着ましようっていうのが第一なんですが、現代の生活習慣や価値観の違いで、だんだんときもの離れしている様に感じます。お花やお茶の先生方にも、羽織るものだけくらいは買えるから作ってよっていわれる所以、今までの道行コートじゃなくて、きものの上にもっとシンプルに羽織れる途中羽織を提案したりします。でも、きものを崩すつもりはないんです。反物はきものために生まれてきますのに、その産業が成り立たないときに、きものに近づけたかたちで今風に着れないかというのが私の提案です。それは素材を生かすことです。切り刻むのは似合わない、斜めの線もだめ。40cm弱の幅は、斜めの線を使ったようなデザインはずれてしまう。洋服生地とはまったく違います。それで直線のきもの生地を使って、直線的な仕事で、ちょっとしたことで今風に着れないかって提案ですので、できれば私は「第三のきもの」といいたい。

素材がすばらしいから私はがんばってるんであって、きものがだめっていうつもりはまったくないです。きものの上にでも羽織りたいよね、日本の素材をなくしたくないよねってことから始まります。だからゆりかごから墓場まで、という言葉がありますが、産まれた赤ちゃんの産着を自分で作ってみたり、格調高いウェディングドレスもつくります、そういうことで産業の発展につながればいいと思ってるんです。地元というのは皆さん、こんなにすごいよといくらいたても、親父が織ってたしな、親父が染めてたしなっていう



ところから抜け出せない。本当にすばらしいものって、きものに携わってる方がどれだけ思われてるか。でも、このすばらしい文化は一回なくしたらもう出てこないのではないかと危機感を感じ、海外に提案してみたりしています。

海外でショーやると、やはりブロバーなんですね。新聞記事にもなります。でもファッショントンショーや用としてつくりますので、それは売りものではないんですが、海外の方のほうがわかってくれるというか感動があるというか。とにかく、なくしてはいけない素材だっていうことで、素材を生かしながらつくつてるのが現状です。日本でも「きものサミット」が行われます。はじめは京都が中心になって、全国のきもの産地からいろんな方が集まられたんですが、やはり非常にきびしい。そこで全国産地を回ることになって、その第1回が長浜でした。そのときに、最後のお酒の席でファッショントンショーやれっていわれたけど私、お断りしたんです。そんなお酒の世界で提案するものは何もないですと。もし1時間私に時間をくだされば、提案型のファッショントンショーやしますっていったんです。だから、そのときにジーパンの上にも着せました、きものの上にも着せました。いろんな提案を70着くらい出したんですかね。で、きものがだめだったら反物でこういう用途があるんじゃないですかって。「もしきものでだめだったら」と言い訳しながらの提案でした

けれど、稻盛さん、これはお名前挙げてもいいと思うんですが、そのころ京都の理事長だったのかな。非常にほめられて、俺も1,000万出す、よしお前も出せ、いろんな方々が集まられて、とにかくこの仲間できものを何とかするために、かたちを変えてもいいから提案しようじゃないかってことをおっしゃったことがあります。

プロポーションに合わせて布地を切り刻むのが洋風の世界。きものはだいたいフリーサイズで、太った人もやせた人も着られる、これが日本の文化です。帯ひとつでも、上に締めたり下に締めたりで表情が変えられる。そのためのきもの地ですので、切り刻まないで世界の人に着せられるっていう提案ですが、いい方法ありませんか。ごめんなさい、しゃべり過ぎました。思いが大きいものですから。そういう提案を、日本から新しい衣の文化を、提案されたらいいのになって思ってます。

才門

ありがとうございます。私も驚いたんですけど、野崎さんはきものを否定せずに、きものはすばらしいといわれる。実際私もきものが大好きで、着る機会があるとどんどん着てるんですけど、男性できものがよく似合うと粹ですよね。かっこいいなって思ってるんですね。で、野崎さんがきものはすばらしい、でもきもののままでは海外に出ていくて、外国の方に着てもらえないでしょと。じゃあその考え方を向こうの立場で考えたときに、このいいきもの生地をどう料理したらいいのか、ということを考えておられる。で、向こうの方々は、いいものに対してはすごく評価をしてくれるし、飲み込みも早いと。

これを建築の世界でいうとですね。南禅寺のそばにある何有荘という別荘、このすばらしい建物をアメリカの方が買われて、いま改装中です。他にも、ある織物業の方の広い屋敷が売りに出されるとニュースになりました。物件を海外とつないでくれる方がいらっしゃって、それを何億、何十億の金額の世界ですが、でも切り刻んでもうんではなしに、「日本

の文化、その建物とか庭園も含めて十分に理解してくださる方はどうぞ」、とその方はいっておられましたけども、まさにそういうことだと思うんです。日本の方は別のところを見てる、でも外国の方はしっかりと本質を見ている、というようなことが京都でもいま起こってるんです。私も京都へきてから、いろいろないいお屋敷が潰れていったの目にしました。一時期町家ブームもありましたけど、あれはいい町家もありますけども、だめな町家もいっぱいある。それをみんな後生大事に直して、それらしくするんですけど、あまりよくないものはなんぼ触ったってよくならないんで、その悪い例を見た者が、知らず知らず気付き、だんだんブームが去っていくっていうのは、そういうところから始まる僕は思うんです。

例えば茶道の世界でもこの茶室っていうものは、どういうふうに設計していくかっていうのが大きなテーマなんですけど、著名な茶室の本歌は本歌として、「好み」として、「写し」として残していく。同時に、それを発展形でどんどんやっていったらいいと思うんですね。で、いろんなパターンがこれまでできあがってきてたわけなんですけど、個人所有というのもあって、ほとんどそれらが皆さんの目には触れないままに、どんどん廢れて、その中で手厚く保護されてきたものがいま残っているだけの話であって、先人の努力っていうのはすごい量、また時間をかけて生み出してきたものが、その中から残ってきたものが今日にあるということなんですね。で、そういう意味で、例えば奥山さんがステンレスを素材に、いろいろ手で編んでやっておられるというご努力は大変なことだと思います。すごく時間がかかるというのもよくわかります。かえって外国に行ったほうが外国人が「ファンタスティック!、私たちには到底まねできない、すばらしい」って称賛される。ただ数や価格が問題になるとは思うんですけども、でもものに仕上げて、それを手に取って見てもらわなくちゃってことで、最近は何で



いうんですか、まずは小物をつくって慣れ親しんでもらう。野崎さんのきものでも、小さい子にまず親しんでもらいたいってありましたように、こんなもんからできますよということではなしに、こういうところからも、こういうところからも同時にに入っていく。例えば奥山さんのステンレスをですね、もっとちっちゃく編む感じにして、もっと手軽に、もっと素早くできるようにして、かごをつくるとかペン立てをつくるとか。こうしてもっともっと手軽につくる方向性を考えると、価格的にも数量的にも、まずこれ、次はこれ、これに合うものはこうだ、というふうになってくるとは思うんですけど。先ほど皆さん何かアイデアないですかとおっしゃってましたけど、自分なりの評価とともに踏まえてですね、実際どうでしたか、海外での評価は。

野崎

はい、先ほど映像でお見せしたものは、大勢のなかでウェルカムやったんですね。会場におられるのは世界中の富豪たちですから、皆さんすばらしいドレス着てます。何百万のドレスもあると思います。そんななかで私は素朴なきもの地の、私の娘もきもの地でスラッと着てただけなのに「おや、おや」。やっぱり違うんですね。色といい素材感といい。おそらく素材のすばらしさです。空港でも声かけられるんです。だからこそ、日本から何か出せないかと思った。だってドレスに作らなくても、羽織るだけで相当な存在感がある



パネラー 奥山幸一（左）野崎文子

んです。国王主催のパーティですね。いわばお金集めのパーティですから、何百万何千万をパンと出されていろんなものが売れていくんですけど、そのなかの方たちが私のものに寄ってきて「どこのだ？ どこからきたんだ？ これいいね」といわれる。きもの着てたら、もっといわれるんでしょうけど、それが産業的に広がるのはむずかしいと思いますので、素材のよさをなんとかしたい。ここに気がつけば、何か新しい産業が生まれるような気がします。

才門 奥山さんの場合ですね、ステンレスという素材はどこでも手に入ります。それで、なぜ奥山さんが違うかというと、それはテクニックですよね。腕です。あれほどむずかしい、手間ひまかかるものを、細かく細かくやっていけるというところが奥山さんの特徴だと思います。奥山さんにお聞きしたいんですけども、海外に出て実際にどんな評価でしたか。

奥山 どっちかというと専門的な方の評価が多かったです。バイヤーさんにはかなりきていました。まあ申しました通り、数と値段、それだけがちょっと合わなかったので今回見送るかたちが多くなりました。でも、じつはまだオファーもあるんです。でも、ちょっといまは才門さんおっしゃった通り、雑貨のほうに移行しようかなと。まあ両方行くんですけどね。とりあえずは一般的なところで馴染

んでもらうような、すぐ使えるような、楽しく使っていただけるようなものを一回作ってみて、その反応を見てみようかと思っております。これまではどうしても自分で力入れてつくりますから、プロトタイプ的なものになって、マニアックになってしまふんですね。そうなると一般的ではないし、値段も高くなる。私としては今後とも企業としてやっていこうという考えですね、やっぱりある程度、採算の合うものをという考え方です。

才門

そうですね。建築でも、茶室もあれば数寄屋もあれば建て売りもあるわけですし、いまやっておられることを私のほうから見ると、アッパーレベルの方々に対してはいいんですけど、一般普及的にやっていくとなると、それなりの安いものを。で、僕は森村さんはすばらしいなと思うんです。けれども高価なものも取り上げてますけれど、すごく普及型で、もういろんな商品を取り上げてますよね。原型、パッケージ、それからコースター、とかですね。はたまたライブ、CDのプロモーションから。そこからまた小物が生まれるとかね。そこら辺の進め方が非常にうまいなあ、また、それが毎回毎回成功されるとは限らないのでしょうか（笑）、そういうふうなことをやっていく、その中から何かが…。

森村

いやいや（笑）。

才門

どうですかね実際。森村さんのいまやっておられること、もうちょっと説明をお願いしたいんですけど。

森村

とにかく一番最初にいえるのは13年前ですね。そのときに販促をしたい、食肉の販促をしたいっていうところから入ってるんですけど、それを完全に会社を起こしてから拒否されてしまったんで、会社の行き先がなかったんで、ああキャラクターかなってところで走った。そのときに企業さんをずっと回ったり、突撃アポで行ったりもしましたけど、全部、



パネラー 森村義幸 / 有限会社エム・イー・エフ代表取締役

もう帰れとか門前払いみたいな状態で、一番ひどかったのは塩まかれたこともありましたし、蹴られたこともありますし。そこから始まって、まあ偶然といいますか、業界の兄貴分的な方があるレコード会社のディレクターでしたんで、それもたまたまアフレコスタジオで出会っただけなんですけど。

でも、そっからですね。逆に一度蹴られたんですけど、そこになぜか謝りに行く。頭を下げに行つたんですね。まあ礼儀知らずですいませんでした、みたいな。で、それでも当然拒否されますわね。とにかく、「来んな来んな」、「何しに来んねんや！」など、ずっと追い払われながら、ちょっとずつ人脈ができて、まあ、それを見てる方がおられたっていうことですよね。私のその姿をずっと見てる方がおられまして、その方と出会い、知り合い、で気がつけば外堀が全部埋まってて、外堀が埋まると同時に仕事のほうもだんだん日々変化していったみたいなことです。具体的にいえば、東映アニメーションさんとか、はじめは全然入れなかつたんですが、それが「999(スリーナイン)」とか作者の松本零士先生との絡みがあったおかげで、いつのまにか東映にスムーズに入れたりとか。そういう外堀を埋めるかたちで今日まできたんです。それとともに仕事の内容が変わってきたっていう感じです。ですから僕の場合は、出会いの数だけ仕事が増えていってるだけで、特別に変わったことはしてないです。技術的なことは確

かに向上させるようにしてまして、フィギュアでもいろいろ原型つくってるんですけど。

才門 すごく高価ですよね。

森村 あ、この辺はね。キットは高価ですけど、工業ベースの原型に関しては、ある程度高価ではありますけど、安く売られるんですけどね。

才門 たとえばその原型から量販体制に入つても、先ほどお聞きしましたが、ひとつが2万円のようなもの…

森村 それは販売価格ですね。安いものは、玩具で1、2万くらいですかね。

才門 でもそれは大人の、それが好きな人だけに許される価格であって、その半面、ストラップみたいな小さい子どもでも買える商品とか、ラスカルショップで売られてるものとか。高価な模型だけやつたら、俺はこれしかやらへん、これが好きなんやつてつくるって人も多いと思うんですけど、片やラスカルやストラップとかポスターとかもあり両方を扱っている。だから森村さんはすごく柔軟だなと思うんですね。

森村 結局その、大手さんが必ず参入するのは低価格で大量生産なんですね。じゃあうちの会社の場合はどうしたかっていうと、完全にひとつですべてがまかなえるシステムを先につくったんです。パッケージング、量産、原型を全部僕ところの会社だけで成立するようにして、当然ロット数は通常よりは少なく、一個からやってるものもあります。で、それを用いて次のステップでこうしましょう、ああしましょうっていう提案をしながら、アイテム数を増やしていくみたいなこともあります。要は、売りたいけど売れないお客様っておられるので、だからロットがこれは1,000ですと。例えばコースターでも、もっと安くあげようとすれば、あげれる部分もあるんですね。



エム・イー・エフが製作した商品群

当然、箔押しとかやれば安いですし、わざわざレーザーでする必要あんのかってなるんですけど。それでも、うちは例えば10セットからしますと。10セットからすることによって、そこでお客様の反応を見ながら、じゃあ次は何十セット、何十セットっていう。いまは毎月、定期的に東京から注文をいただいているんですけども、量に関してはそういう流れでずっと増えてきてるんですね。ただ見てるのは、すべて自己完結できるようになってことと、相手に在庫を持たせない、こちらも在庫を持たない。そういうリスクヘッジを、とりあえずリスクを下げて、相手のリスクを少なくするけども、あんまりハイリターンはないですよと。ただ、これが大きくなったら種類も増やせるし、商品の回転率、いまの商品のスパンは半年持たないし、キャラクターなんて3カ月くらいの命なので、そういうものの交換時期にタイミング合うようにってことも全部合わせた上で、いまはそういうセールスしながら増やしてます。

一方そのテーブルに置いてあるアユモドキとかの商品は、これは完全に亀岡市の歴史資料館にこられるお客様、とくにお子さんたちですね。将来の亀岡を育していく子どもたちですので、そういう子どもがアユモドキが生息している亀岡のよさを何かしら手で持つて感じてもらえるものになればいいなっていうところで提案して始まってるものです。だからその、基本的には私の頭が柔らかいとは

思わないんですけど、会った方の話のなかで、まあ飲みながら方向付けみたいなことをしてまずやってみる。失敗しても成功してもやったもん勝ちなので、まあそんなに大きい失敗はないですし、だからわざと失敗もしますし。ただひとつ自分のなかでテーマを持ってるのは、例えばロボットでいうと、動かすからプロポーションを変えるっていうような仕事は僕らはせずに、イメージを持った方たちのものを再現するっていうふうに、なるべく僕らは心がけるようにしてます。アユモドキでも、ほんまは小さい小さい魚なんんですけど、何かしら手にとって本物感を感じてもらえるような。だから、なるべくアレンジをしないっていうのも心がけてます。アレンジしていいものにつくるのは簡単んですけど、アレンジせずにクオリティ上げていくほうが楽しいんで、そういう方向は心がけていくつもりです。いまのアユモドキにしても、当然もう少し進化系にはなっていきますし、そういうふうにもやりたいですし、今後もその方向は基本変わらないかなということで、結果私はこのような流れで出会いとともに今日まで来ただけです。

「京都」の威力は京都人がいちばん知らない

才門

ありがとうございます。中島信也さん、例えば私が今持っているこのボルビックの水ですけれども、これを宣伝広告してくれといわれると、どのようにでも料理できると思うんですね。一方ではこの水とか、他方では高価なものを持ってくれっていってオファーがあるとか。例えばカップラーメン、一個何百円のものもあると思いますね。そういうなかで料理していく幅は無限にあると思うんですけど、そのなかでキラリとこう、人の目に留まっていくとか、そこら辺のむずかしさっていうのも多種多様ですね。いや、これしかせえへん、高いものしかせえへん、俺は世界の中島やとかいってですね。これはいらない、これはいらないというのではないと思うんです

けど、そこら辺はどうですかね。

中島 そうですね。あの、もう本当に、いやまあ多分、森村さんも近い感覚やと思うんですけど、例えばそうですね、野崎さんがつくるきものの生地のよさとか、それは世界にもっと知らせなきゃいけないとかいうようなものを、CMの世界で持ってるかといったら何も持っていないですね。何もないんですわ。ただはっきりしてるのは、もともとカップヌードルの原始人のコマーシャルが世界で結構評価をされたときに、意外と日本人が団に乗って、世界でも通用すんねやと思ってね、勘違いしたことがあったんですけど。それは全然通用しないんですね。全然違うんです。で、これは何とかせなあかんと洋風の表現を一生懸命まねした時期もあって、これも10年ぐらい前までの10年間ぐらいは、自分でもそうでしたけども、結構海外っぽい作りのもので、何とか世界の仲間入りができるかなというふうに思ったりもしたんですけど、ここへきて僕は、例えば僕が好きなコマーシャルで、あんまりこっちでは流れてないと思うんですけども、「そうだ、京都、行こう」ってあるんですけども、ああいうのも西洋の人からは意味不明なんですね。なになに、それでどうしたのと。だから「古池や 蛙飛び込む 水の音」。それでどうなったん?って聞いてくるから、それは、だから「古池や 蛙飛び込む 水の音」やでと。ええでしようと。「古池や 蛙飛び込む 水の音」。それでどうなったんだと。「で?」っていうふうに聞いてくるのが向こうの文化なんですけども、だから先ほど野崎さんも、自分たちの知らないものを海外で発見されるということなんんですけども、逆に僕は、これはあかんと。もう無理やな、この人らに「古池や」わかれへんなっていうのがちょっとだけあって、日本で僕たちがわかり合えるものを突き詰めていくことで、例えばきものって伝統がありますよね。多分それは自分たちのことだけを考えて、まあ自分たちのことだけってのは変だけど、最初から輸出とか考えずにずっと



とやってきたことのすごい歴史がある、だから世界に伝わっていくようなものがあると。で、CMにも未来がもしあるとするならばね、それはやっぱり極めていく、自分たちが納得のいくところ、もしかしたら外国人にはわからないけど、自分たちがすばらしいと思うところをきっちりと作り続けるということをしていかなあかんな、というふうな切り替えがすごく起ったんですね。だから、まだまだ浅い世界なわけです、コマーシャルの世界ってね。テレビのコマーシャルは40年、50年ぐらいのものですから。そういうものなので、ただ、やっぱり見方というか価値、価値観、物差しというのは僕たちのなかにずっと古代から根付いてる物差しがあるんで、この僕たちの生活、僕たちの四季に合わせた物差しのなかで、まず僕らは一番、本当に人を楽しませるもの、人を感動させられるものをつくり続けるということを、とにかくやり続けようと。韓国、台湾、タイとか、そういう東南アジアの国々と僕らはよくシンポジウムとかあるんですけど、ものすごくうらやましがられるんですよ、あなた方の国にはオリジナリティがあるねと。彼ら、ものすごく勉強して、西洋でも評価されるようなものをつくってるんですけど、結局、西洋風なんですよ。で、じゃないところで僕らやってるので、意味わからんけど、あんたところは何か持ってるね、っていうものはあって、それちょっとなんとなく、京都の立場に近いかなというふうに思

ったりするんですけどね。で、僕から質問ですけど、森村さんね、東京へ出て行きはるときに、京都というのは何かあったの？

森村 まあ一番わかりやすいのでいうとですね。それは東京で仕事をするほうが、版元も東京ですし、やりやすいのはやりやすいんです。OEMの商品でも松竹さんとかの商品でもそうですけど、東京なら直、行けるんで楽ですね。ただ、会社を移すのがじやまくさいとか、自分が行くのもじやまくさいっていうのもあるんですけど、何よりも一番わかりやすいのは「京都のエム・イー・エフです」っていうたほうが、相手はお客さんだと思ってもらえるんですね。東京都内にいると、きっと同業者とか、そういうくくりで終わっちゃうんですけど、京都から行くことによって、勝手に背中に京都っていうブランドが付いちゃう。向こうからしたら「ああ京都からきたんや」みたいな。

才門 それ、勝手に向こうが想像してくれるってこと？

森村 そうそう。普通にお土産でおたべ置いとくだけで、京都からわざわざきはったって後で電話もらえる。それだけ、その繰り返しみたいな。で、行ったらいつのまにか「ああ京都からの来客や」ってみんな集まってくれたり。仕事に行ってただけなんですけど、行くと特別扱いされるんで。気がつけば版権も割と自由にさしてもらえるようになったりとか、もう勝手にお任せしますとかで内心「ええのん？」みたいな感じにもなりましたけど。まあはじめに比べたらね。塩まかれたときにはどうしようと思いましたから（笑）。向こうからしたら異物なんで、異物やけども、京都っていうラベルを背中にピッと付けて、京都からきたっていうと、急にグレードがピッと上がるっていう。だから、僕は京都に会社を置いとこうと、そこで思いました（笑）。



才門 ま、あの、森村さんの場合は京都ブランドってこともあるかもしれませんけど、京都のブランド、京都からきたっていう他に、森村さん自身のキャラクターもあるんじゃないかなと僕は思うんですけど…。

森村 ああ、九州方面ですからね、僕は。

才門 それで誤解される、あ、京都と九州両方使えるということですね。

森村 本当は九州ではないんですけど、まあいいかなってそれも。「あ、そうかそうか、九州の人が京都で泊まってからきはったんや」と。まあそれでも、京都っていうのがつくほうが。

才門 上洛してからきたんやと。

森村 そうそう、そんな感じ。だから、それはそれで。僕、あんまり人の顔覚えないんですけど、周りが僕のことを覚えていただけるんで、それで十分かな。

才門 まあ、いろんな引き出しが、森村さんにはあるのかな…。

森村 いやないです、だから僕はほんまに何も考えてないんで。

才門 いやいや、考えてなくても周りが想像して



「あ、九州の引き出しがある」とかですね。

森村 いや、たまたまいうことが引っかかったっていうケースがほとんどですし、そんな感覚ですよ。本当にたまたまで、ただひとつだけ忘れたらあかんのは、相手のことなり、例えば亀岡のことで気をつけたいことは、僕が資料館で一日中ずっといたんですけど、その資料館で何気なく展示物をずっと見てました、意味なく。で、そこから浮いてくるもんがあって、浮いてくるものだけをすくい上げてる感覚ですね。それだけで、あとちょっと、ここではいいませんけど、結構毒舌系なので、関東ではほんま褒められます。結構平氣でボロカスいうんで。

才門 「あなたがそんなにいうとは思いませんでした(笑)。」というような。

森村 そうそう。あかんもんはあかん、嫌いなもんは嫌いっていいますし。

才門 ほんまに京都ですかって。

森村 っていわれたりします、そういうふうなんで。

才門 でも、前に中島信也さんとお話ししたときに、別に東京じゃなくて、京都から直接発信していったらええじゃないかというお話しされていて、あのときはちょっと時間なかったです

けども、そのあたりのことも、中島さんはいま東京に住んでおられますし、いろんな業界の方々ともおつきあいされますし。また反対にCMの撮影なんかで京都来られたりということで。

中島 あの、森村さんみたいに、東京に行くときに、本当に京都、背中にシール、京都のTシャツ着ていくってことやんね。

中島 で、おたべを持って行く。おたべを持って行くってことで。

森村 そうですね。525円。

中島 525円で。すごい。ひとつすごいリアルに、それぐらい思ってます。東京にいると、まさに京都からきたったんやと。で、京都からこんな何、モデル会社みたいな、京都にこんなんっていうのが結構驚きがあって、得な部分っていうのはすごくあると思うんですけどね。この前、僕がデザイン賞の審査のときに感じたのは、僕は大阪にいるとき、さっきもいいましたけど、ビートルズになるために東京に行くと。美術の先生が、お前、東京芸大受けなあかんと。それ、大阪芸大でもええんちゃいます? いや全然ちゃうんやと。どこがちゃうんですかっていうほどに何も知らんと僕、東京に行ったんですけども、まあ東京で一旗上げるぞ的なことっていうものが何もない。必要ないというか。僕は京都の人は世界に一旗上げようとして、もうしてられまよ。こちらの方とかね。お二人さんは結構、世界に向けてる。東京なんか飛び越えてるっていうところがある。これが僕は先ほどのからちょっと森村さんと話してて、やり方はなかなか、この辺しかないかなっていう話をしてたんやけどね。まあやり方はあとに置いておくとして、考え方としては京都発っていうことは、先ほどの東京に森村さんが行くときと同じように、世界の人たちが京都っていう言葉を知ってるから。で、最初に僕いった



のは、京都の実態とは何だろうっていうことなんだけどもね。よくわからへん、お寺かな、紅葉かな、おたべかな、とかいろいろ思ってるんですよ。その実態は話し出すと大変やと思うんですけど、何らかがあると。これは申し訳ないけども、大阪よりあると。大阪発の新しいクリエイティブっていうたら、何かたこ焼きみたいな、大阪ってすでにその辺、背負ってると思うんですよね。大阪発はおしゃれというよりおもしろい、が強い感じ。才門さんは岸和田。メイドイン岸和田、ってだんじり感のほうが強くないですか。京都発っていうと、これは世界に、メイドイン京都っていわれると、メイドインジャパンを超えるイメージがあるんじゃなかろうかと。それは使ったほうがえんじやないかなと。ただ、むやみやたらとメイドイン京都とみやびだけではあかんぞと。そのやり方については、いろいろと方法を練らんといかんと思うんですけど、大阪から東京に行った人間としては、京都は、もっともっと京都という名前はするく使ったほうがええぞというふうに僕は思ってるんですね。

才門 京都のブランドってことで先ほどいわれましたけど、私、岸和田出身で、「あそこ、だんじりだけで何もあらへん。」みたいなことをいわれるんですけど、そんなことはなくてですね。着物でいうたらＮＨＫ朝の連続テレビ小説のドラマで放映されました「カーネーシ

ョン」である小篠さんファミリーがあるわけです。小篠さんファミリーのことをちょっと話しますと、野崎さんがおっしゃるように、「いかにハサミを入れないかっていうことでこの美しさを」って言っておられるけど、確かあの「カーネーション」なんか見てますと、着物にズバッとうなハサミを入れるんですね。多分着物にハサミ入れてるって心が痛いと思うんですね。でもそれをズバズバそのまま切っていって、体に合うようにしてやっていく、ああいう大胆さが今必要なのかな。またそのドラマの中でアッパッパーですか。小篠さんはアッパッパーで誰にでも着られる体型の着物(普段着)を創作された。彼女は、僕、アイデアマンっていうかアイデアウーマンだったのかなと思って。もちろん時代がそれを許した、許させたというか。一昔前であつたら、あんなこともできなかつただろうなと思うんですね。一応何も岸和田から生まれないというわけではないので、大阪からも、たこ焼きだけじゃないんで。

中島 でも、世界に向けるとなると「キシワダ」って「キョウト」とはやっぱりちやいますよね。

才門 はい。よく言われます。

中島 大阪ってやっぱり通天閣のイメージが強いですよね。たこ焼きとか。ほんまに。たこ焼き、づばらや、かに道楽いう感じで、くいだおれ、みたいな感じがにじみます。だから「京都デザイン会議」ってかっこいいけども、「大阪デザイン会議」になるとなんか「おもろい」感じを受ける。コマーシャルの世界でも大阪発に期待するのは「かっこつけないおもろさ」ですもん。京都はそのへん、すんごいブランド感があるんです。

才門 京都デザイン会議っていうとブランドすごい会議で…。

中島 うん。だから、それはね、ちょっと僕、ひと



つヒントがあると思うんですよ。京都デザイン協会っていうのは、なんか相当な協会に思える、間違いなく。それが実態が何かはわからんけれども、思えるって。そこで、森村さんは京都デザイン協会へのコラボ提案みたいなのがあるっていう、ちょっと聞いてみたいですか。

京都デザイン協会がめざす次のステップとは

森村 これも先ほどずっとコーヒー飲みながら、今日最後にでもちょっとご提案できたらな、みたいな話をしておりました。多分ここに頑張られてるお客様、お客様ちゃう（笑）、がんばられてる方たくさんおられると思いますし、それも才門先生もいわれた通り、光るものを持たれてる方おられるんですけど、やっぱり外に対するルートなり人脈を持ってる人は既にとっとと京都を出て行っていますし、発信されてますから、でもそうでない方もいっぱいおられますし、できない方もたくさんおられると思うんですね。で、そのなかで、ひとつのかたち、僕なんかは食肉の関係の仕事でアメリカから輸入するんですけど、そのとき向こうは輸出連合会っていうのがあるんですね。それはパッカーっていう、いわゆる屠畜工場の、その日本向けの企画を持ってる人たちがお金を出しあって組織をつくって、当然政府からも予算が出て、あるいは自分らが集めたお金で、全世界に対して食

肉の発信をしています。その応用ってわけではないんですけども、京都デザイン協会さんが将来的にはそういう形態をね、公的なかたちとしてめざすというのはありではないかなと思うんです。ただ単に組織をつくるんではなくて、皆さんから少しでも集まったお金で、どんどん先に行ってもらうというか、要はルートづくりですね。そのために働いてもらえるような組織づくりをしていくのは、ありではないかなと。ただ、京都っていうのはやっぱり残しといでですね。あくまでも次のステップっていうのは考えていかれたほうが、まあちょっと偉そうで申し訳ないんですけど、僕が開拓できるタイプではないのと、僕らの仕事に必要な、こういうキャラクターものの版権って、僕らだけではなかなかむずかしいことが多いんです。海外版権は国内と別になったりとか。で、海外に行くとマフィアが版権を持ってたりするんで、まあ命がけなどころもあるんです。だから僕らは国内の市場しか相手にできないので、だめなんですけど。海外に発信、で、京都っていうブランドがあれば、僕はひとつのかたちとして、京都デザイン協会さん、名前がそのまま出るかどうかは別として、そのなかでみんなが集まっていたら、例えば一社 1,000 円でもいいですやん、それが 10 年貯まったらなんぼになんねんっていう。ただ、ある程度のお金が集まる悪い組織がなかで生まれる場合もあるので、それはきっちりととかんと。お金が入ってくると、必ずそこから組織崩壊しますんで。当然そこは気をつけなければいけないところなんですけど、そういうふうな方向性はいかがなもんだろうかなってことをちょっと、中島先生とお話しさせていただきました。

中島

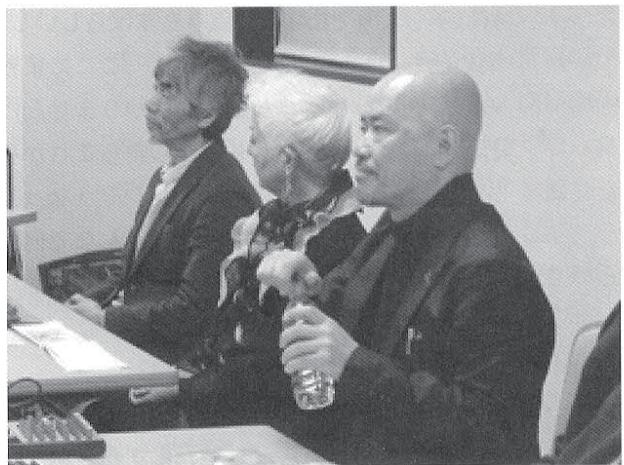
ほんであの、例えばワコールさんっていう会社が京都にありますけどね。すごいいろいろ開発されてますけども、京都デザイン協会プラスワコール、あるいは京都デザイン協会プラス京セラとか。京都デザイン協会プラスっ

ていう、まあある種デザインとかクリエイティブのお墨付きみたいなね、そういうものを各企業とやっていったりすると、なんにも手がかりがないところでは何とかしていく手になるかなと。野崎先生みたいになんかもう、ガーッとこう、キャラクターっていうかね、すごくパワーがあふれまくってますよね。

例えばそういうね、京都デザイン協会プラスって、だから僕がいってるように、京都というのは実態はわからないんですけども、何か持ってるイメージがあるんで、それは使っていって。で、ほう、ちょっとちょっと違うものが出てるなというね、そういうものがまず日本にでも発信できたりとか。それでそこから、例えば森村さんいってるみたいに1人1,000円出しながら、海外、そうか、京都デザイン協会っていう例えば貿易窓口かもしれません。これはいろんなグッズを売るにしても、京都デザイン協会っていうところから買うと、これはちゃんとした京都のものがくるぞ、本物がくるぞと。そういうところが、まだどこにも確立されてないとするならば、その部分で自分たちがそういうチームになっていくというのもありなんじゃないかという話をね、ちょっとしてたんですけど、先生どうですか。

野崎

私もじつは、一人ぼっちでやりたいことをやってるだけの人間です。で、なぜ海外からお呼びいただくなつていうと、本当に人と人のちっちゃなつながりだけなんです。商業ベースも何もない、けれども自分がつくりたいものをつくるっていうところに、皆さん、もしかしたら称賛されてるかも。有る会社に3年間は所属してたんですが、私だんだん自分が小さくなつて、ものがつくれなくなつた。10cmの布が何でそこで使って、これで売れるのにどうして残るんやとか、非常に計算ばっかりいわれると私のデザイン力はもう怖くて怖くて。それで飛び出たんですが、日本の反物は絶対になくしてはならないっていう、最終の信念だけで、売れるとか売れな

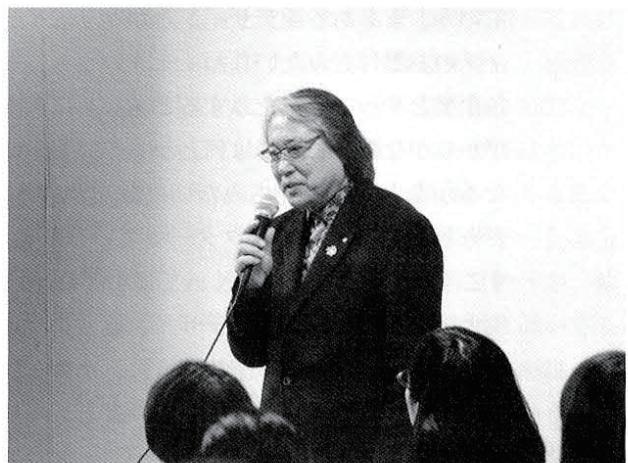


いとかは自分の責任でいいと思ってつくったら、不思議なもので、あちこちから呼ばれるようになった。だから、洋服みたいに体に合わせて切り刻む作り方をするのであれば、きもの素材を扱うなかではむずかしいと思いました。これだけの幅で洋の服つくっても、それは洋服生地でつくったほうがいいんじゃないって思うと、経営者とは合わなくなりました。それで、よし、飛び出て何かやってみよう。無一文でしたよ。私、何もない人間でしたからね。でもはじめに端切れをもらひながら、私はこんなかたちがいいに決まるなんて自分で信じて、きものに近づけるかたち、切り込まないかたちをずっと追求していったつもりです。フリルを付けるとか残りのものでもやってますけど、それは部分であつて、基本的には日本のきもの素材を傷めないで何かできないかなと。「君のは洋の服でもない、かといって、きものでもないしな」といわれると「はい私、絹衣です、衣なんです」っていいます。そして、この世界を何とか開発したらおもしろいんじゃないかなと。だって、きもの地はたくさんの人の手が入って大変ですから、素材的にも高価です。反物にたずさわり、深く知れば知るほど大変な素材ではあると私は思います。きものに一番マッチするように生まれてる素材ですからね。切り刻まないで、羽織れる姿ってことで、提案させていただいております。確かに素材はどんどん悪くなっている様に感じます。昔の素

材は手も入ってますし、織りもすばらしいし、染め色も美しい。だから業界は、ここに業界の方がいらっしゃるかどうかわかりませんけど、日本の染織文化はもしかしたらこれから先、低迷していくんじゃないかな。そうなってしまうのが怖いものですから、みんなで何かやりませんか。やるとすれば、やはり京都が一番似合います。

才門 きものこといろいろとお話を出ますけど、黒竹さん、いらっしゃいますか。私が存じ上げてますのは、黒竹さんはもともとは織物業界におられて、いまは多方面に手を広げてやっておられます。せっかく今日はご出席いただいてるんで、その辺のことでもお聞きしたいなと思うんですけど。

黒竹 どうもありがとうございます。いまご紹介いただきました黒竹です。私は呉服屋さんのデザイン室にて、きもののデザインなどを最初にやっておりました。それ以後独立して、自分の好きなものをつくりていこうということで取り組みを始めました。いろんなものをつくるのが好きなほうですから、あまりひとつのものにこだわってないというところもあるんですが、周期的に好きになると5、6年から10年くらいはそれを追求してやることで、いろいろと取り組みをしてまいりました。いまお聞きしてると、本当におしゃってた通りで、海外へ行くと日本の文化とかその奥の深さを、海外の方は大変認知されております。やはり京都の、あるいは日本を代表する京都の染織技術とか、そういうものに関するレベルは非常に高いわけですから、それをそのまま、そのようにして表現されるというのは大賛成でございます。
それと、最近は少なくなりましたけど、駿前留学ということで英会話を教える会社がございましたが、英語をしゃべることはもちろん重要なんですが、日本の文化をよく勉強されてない方が多いために、海外で英語をしゃべっても非常に内容が薄い。中島先生のお話、



参加者 黒竹節人／株式会社くろちく代表取締役

また才門さんもおしゃってたように、扉開けて開けて、奥行くと本物があるんですが、なかなか目の触れるところではそういう本物に接する機会がないということもあります。そういうことで、グローバル化のなかではやはり、もっと日本的なものをしっかり勉強して出したほうがいいんじゃないかなと。私もメゾン・ド・オブジェで3回ほど出展して市場調査もしておりますし、今度やるんであればこの辺かなというところでリサーチはしております。

いろんなことをやるというなかで、私が20年ほど前からやりだしたひとつに町家の再生があります。最近京都の建物では町家だけでなく、破綻したような商業ビルとか、はやってない映画館とか、こういう建物はまた、なかなか潰しにくい。いまの消防法並びに耐震基準等、用途変更するために非常に問題が多いなかで、それらをどういうふうにその土地に合ったものに変えていくか。これは町家だけじゃなくビルなどの建物も焦点に入ってきており、やるべきことなど最近感じております。そういったなかでの取り組みのひとつを紹介させていただきますと、新京極の四条上がったところに昔、映画館がございました。映画館になって93年、現建物になって40年前後、映画館は20数年ほど前にやめた状態だったんですが、そこに再利用の道をということで私どもで取り組みまして、スポーツバーということですね。映画館ですし



奈良磐雄 / 京都デザイン協会理事長

200 インチぐらいの映像もあります。そこでワイワイ楽しんで飲んでました。元映画館ですから相当な人数が入れます。そういうふうにバーで遊ぶ、またスポーツだけではなしに、いろんな文化性のものが、映像を通して映画館というスケールで発表していく。そういう文化的なことにも教育的なことにも利用していくように取り組んでいきたいと思っております。最近はそういうことをさせていただいております。また後ほどよろしくお願ひいたします。

才門

ありがとうございます。スポーツバーというのは、例えば亀岡でスタジアムができるということもありますし、すごくタイムリーだな、さすが黒竹さん、いろいろリサーチをされて、これから展望を考えておられるのかなというのが、お話を聞いて私も刺激になりました。ありがとうございました。

時間もだんだん迫ってまいりました。まだまだお聞きしたいんですけども、もう少しだけ時間があるので、最初に申し上げましたように皆さんからご意見があれば、また質疑もいただきたいと思います。いかがでしょうか。ございませんか。ございませんでしたら、先ほど中島信也さんが触れておられました、この京都デザイン会議は京都デザイン関連団体協議会っていうことでやらせていただいているんですけど、今日はその1団体である京都

デザイン協会の理事長にきていただいていますので、そういう役割ですね。私も常日頃から考えてて、織物問屋さん含めて、問屋関係の流れが崩壊してしまって、何もなくなった状態になってると。でも京都デザイン協会っていうのは公益ということもありまして、その窓口にならなければならないんじゃなかろうかと。そういうふうになっていかなくちゃいけないと僕は思うんですけど、その辺りについて最後、理事長からご意見をお聞きしたいと思います。

奈良

パネラーの方のそれぞれの立場からいろいろな現状、きびしいことも、また華々しい成果もお聞きしましたし、最後のほうでは森村さん、中島さんからも京都デザイン協会の今後の役割についてのご提案もいただきました。京都デザイン関連団体協議会は先に申しました通り 12 の団体で組織されています。東京サイド、別サイドから見られたら何かありますというふうに思っていただけの部分もあるようですが、実態は全体として非常に疲弊している状況があります。社団法人京都デザイン協会も何かやらないと維持して行くのが困難と自覚しています。で、このたび法律が変わり、社団法人も一般社団法人と公益社団法人に分別するので、あなた方はどちらの道を選択しますかと迫られました。そこで、私たちの45年間の活動の歴史は、公益に資する活動以外のなにものでもないとの自負がありますから、審査は非常にきびしくなることは覚悟の上で、公益社団法人をめざそと、行政担当者の厳しくも温かい指導をいただきながら、ここ2年間必死になって取り組んできました。苦労の甲斐があり、平成25年6月4日、晴れて「公益社団法人京都デザイン協会」として新たなスタートを切ることになりました。私たちはデザインを切り口とした公益事業も会員の会費で運営をしていますので、できるだけ広く協会の存続目的に賛同していただける方々に呼びかけ、一緒にやりましょうという勧誘活動を積極的に展開する必要があ



ると考えています。京都デザイン協会の発足当初はデザイナーの職能団体といったものでした。しかしデザインは幅が広いわけですから、デザインジャンル横断型の、どのジャンルのデザインでも、またデザイナーだけでなくデザインを活用する企業や団体、デザインを学びたい人々まで幅広く参加OKでそれらの同志が集まって社会に貢献できる事をやりましょうとリスタートしていきます。そんな事ですので、一緒にやっていただければありがたいと思っています。森村さんも会員ですね(笑)。ちょうど時間となりました。どうもありがとうございました。

才門 本日は本当にありがとうございます。出席していただいた皆さまのなかには奈良デザイン協会の中川さん、神戸デザイン協会の神戸さん、老田さん、濱田さん、そして国際伝統工芸センターの近藤さんもきていただきて、ご意見をいただきたかったんですけど時間になってしまいました。でも、私思うんですね。中島信也さん、私たち大学の先輩後輩の関係ですけれども、先輩が校友会会长で私が支部長だった時代、上から頼まれもせんのに関西は勝手に集まって盛り上がってやってると。そういう東京から動かすのではなく、地方から独自の動きが大事かなと思うんですけども。

中島 はい。大阪からみると神戸はおしゃれで奈良

は歴史があるイメージ。大阪は僕の地元ですけど「くいだおれ」と「おもしろい」。それに特徴が全然違う。京都、神戸、奈良、大阪、この関西圏ってすごい。ある意味近隣なんだけど、すごく個性がはっきりしてますね。そこで才門さんみたいにこう、集まってなにか、やろうというのも大きい話ですね。でもやっぱり京都はね、京都というものを背中に貼つてるわけだから、それはガーンといってほしいなと思いますね。僕も京都に生まれとったらもう少し雅やかになってたんちゃうかな。

才門

ありがたいお褒めの言葉です。中島信也さん、いろいろお忙しいなか東京から九州へ、九州からまた途中京都に寄っていただきてお時間とっていただき本当にありがとうございました。それと森村さんもいろいろ実物の作品を持ってきてくださいて、皆さん終わってからでも見ていただいたらと思います。でもタッチ(手で触れる)はごめんなさいということで。

中島

何言うてますのん、才門さん。(笑)

才門

あの、皆さん高価なものだそうですので。野崎さん、今日はエネルギッシュなお話ありがとうございます。いろんなところで頑張っておられるんだなという思いが伝わってまいりましたので、これからお互いに、私たちはデザイン協会として、いろいろ刺激しあっていけたらいいなと思います。奥山さん、どうしたらいいかなといろいろ思い悩んでおられると思いますけれども、また私たちも窓口となって、こういう情報があるよっていうことがあれば、国内に限らず海外においてもどんどんお互いに意志を通わせてコミュニケーションできればいいなど。また、近隣の奈良や神戸のデザイン協会の方々のお助けも借りて、情報がありましたらいたしたりして、それをまたお知らせしたりっていうことも、そういうことがあってこそ私たちの役目が務まるのかなと思っております。

奥山 それは京都にデザイン協会に入会しなければだめなんですか？

才門 会員になっていただくと非常にありがたいですね。スムーズですしね。まっ先に情報がまいりますので（笑）。また、このあとには懇親会も用意しておりますので、京都デザイン会議のほうはこれで終わらせていただきます。皆さん、どうもありがとうございました。

小山 最後、ちょっと時間がなくて駆け込み状態になりましたが、パネラーの皆さん、そして本日ご参加の皆さん、ありがとうございました。これで第33回京都デザイン会議を閉会させていただきます。なお、いまご案内がありましたけれども、このあと中島信也さんを囲んでの交流親睦会、またいろいろなお話を聞かせていただけるかと思います。本日はどうもありがとうございました。お疲れさまでした。



交流親睦会

社団法人 京都デザイン協会 機関誌 DIALOGUE2013

テーマ 京都デザイナーの未来
～京ものを世界へ～

○発行日 平成25年3月31日

○発行 京都デザイン関連団体協議会

○議長 三輪 泰司

○副議長 奈良 譲雄

○実行委員長 才門 俊文

○実行委員 大石 義一

川口 凱正

藤原 義明

小山 比奈子

大野 好之

永田 義博

山岡 敏和（撮影担当）

○会議記録 黒田 正子／（翻）ワード

○事務局 社団法人京都デザイン協会

〒604-8247

京都市中京区塩屋町39（三条通小川北西角）

TEL 050-3385-8008

FAX 050-3385-8009

DIALOGUE2013

第33回京都デザイン会議

- 日時 / 平成25年3月10日（日）/PM2:30~4:30
- 会場 / メルパルク京都
- 主催 / 京都デザイン関連団体協議会
　　社団法人京都デザイン協会
- 後援 / 京都府